BOOK REVIEW 書評

ジャータカ物語（上下）

仏教が伝えるインドの説話

津田直子著

ジャータカはブッダの前生における菩薩行が説かれている経典で、「本生経」「本生譚」ともいわれる。紀元前3世紀ごろの古代インドで伝承されていた説話などに、仏教的な内容が付加されて成立したもので、示唆に富むエピソードが収められている。

仏教の伝播に伴い、ジャータカは『イソップ物語』や『アラビアンナイト』に取り入れられ、日本では『今昔物語集』の「月の兎」もそれが元。法隆寺蔵の玉虫厨子に描かれている捨身飼虎図もそれに拠る。

パーリ語仏典には547もの物語が収録されており、本書は上巻に28話、下巻に25話が口語の童話に直し収録されている。

「ラセツは花を持って」は森に住むサルの母子の物語。分別が付くようになり、父に会いたいという息子に、母は、王として群れを率いている父は、おまえを見ると殺してしまうから行かないように、と諭す。それを承知して父の前に現れると、成長した息子が自分の地位を奪うと恐れた父は、悪鬼のラセツがいる池の蓮の花を取ってくるよう伝える。

水中にラセツの気配を感じた息子は、岸から蓮の葉を飛び跳ねながら、たくさんの花を摘み取った。その動作に感嘆したラセツは、花束を抱えて息子に従い、王の前に出る。それを見た途端、父サルは心臓が破裂し、亡くなってしまう。そして息子はサルたちに推され新しい王となった。

単なる親孝行の話ではなく、権力をめぐる父子の葛藤が描かれている。説話とはそういうもので、きれいごとではない大切な人生の教えを物語にして語り伝えていた。それが仏教という普遍宗教に吸収されたことで、今日まで残されたのである。生き方の教訓としては、むしろ説話の方が主役のように思える。

「黄金の茶碗」は落ちぶれた商家の老婆と孫娘をめぐる、2人の行商人の話。ずるい方は老婆をだまそうとして失敗し、誠実な方は正直な商いで恵まれる。人間が抱える問題は古代も今も変わらない。（第三文明選書、2000円+税）

神田明神のこころ

伝統文化を新しい形で継承

大鳥居信史編著

神田祭で知られる神田明神（正式には神田神社）は10年後に創建1300年を迎える。それに向けて昨年末、文化交流館の建設など記念事業が進められており、同社宮司による本書もその1つ。清浄を旨とする神道の生き方から、大鳥居師は早朝の境内清掃を日課としているという。

何度かお参りして驚かされたのは、仕事始めにお参りするビジネスマンの多さ。108の氏子町は神田、日本橋、秋葉原、大手町・丸の内など多くの企業があり、江戸・東京の生活と文化が凝縮されている。

天平2年（730）、出雲氏族の大己貴命の子孫が武蔵国豊島郡芝崎村（現在の大手町・将門塚付近）に社を建てたのが始まり。その後、平将門の墓の周辺で天災が頻発し、将門の祟りと恐れられたため、時宗僧の真教が供養し、延慶2年（1309）同社に祀った。御祭神は大己貴命（おおなむちのみこと）、少彦名命（すくなひこなのみこと）に平将門。

戦国時代には太田道灌や北条氏綱らの武将に崇敬されるようになる。その仕上げが江戸幕府を開いた徳川家康で、江戸城拡張に伴い現在の地に遷座、代々の将軍により崇敬され、江戸総鎮守と呼ばれるようになった。国学や茶道など江戸文化発祥の地でもある。

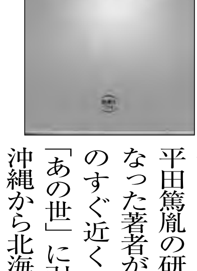
神社神道に基づく国づくりを目指した明治に、天皇に反逆した平将門を祭神から外せとする動きが起こる。議論の末、最終的に政府と東京府は、その意見を退けた。歴史的な祭神を外すのは論外のことで、明治初期の宗教政策の危うさだろう。

関東大震災で社殿が崩壊すると、鉄筋コンクリート造りで再建するなど時代の先取りをしている。昭和50年には平将門を扱った大河ドラマ『風と雲と虹と』で人気が高まり、最近では氏子区域に劇場がある縁でAKB48が豆撒きをするなど、まちと共に発展している。古来からの日本人の心を、新しい形で表現する。文化交流館も増える外国人に日本の文化を伝えるのが目的の1つ。正しい作法でお参りする姿に感心するという。（春秋社、1600円+税）

「あの世」と「この世」のあいだ

たましいのふるさとを訪ねて

谷川ゆに著



水俣生まれの著者の伯父・谷川健一は、民俗学を「神と人間と自然の交渉の学」と定義した。人間も動物の一つだが、死後の世界を想像する点で違う、という。東京で生まれ育ちながら、奇談や怪談が好きになり、平田篤胤の研究者となった著者が、生者のすぐ近くにある「あの世」に引かれ、沖縄から北海道までのそんな土地を訪ねている。

明治35年まで風葬が行われていた与論島でその場所に立つと、死者を生者のように扱ってきた長い歴史を感じる。遺体を納棺して埋葬するのは不人情で、火葬は死者をもう一度死なせることになるという。近代社会は、そうやって生と死を切り離してきた。風葬に使われた洞窟での宴会は、まさに死者との交流である。

宮古島には、60歳以上の女性から神に仕える三役が選ばれ、御嶽（うたき）での神事を担当していた。御嶽は南の島特有の神を祀る聖域で、海の向こうのニライカナイを拝む拝所である。神社の原型とも言えるが、ただ石があるだけ。那覇の波上宮の境内にもあり、深夜に老婦人が拝みに来ていた。

水俣の意味は大きな川の分かれで、水に恵まれた水俣には、遠野のように水の神である河童の伝説がある。そんなふるさとに育った谷川健一は「水俣は水俣病より大きい」と言ったという。近代の暗部を呑み込む力が自然にはあるとの意味か。かつての公害の海は埋め立てられ、市民の公園になっているが、それが解決ではないと著者は感じる。

北海道白老町（しらおいちょう）のアヨロ海岸には、アイヌで「現世と他界をつなぐ通路」とされるアフンルパロ洞穴がある。岩の形状は女陰に似て、「海の胎内くぐり」とされてきた。生と死の連関性が内包された穴が人々の想像を膨らませたのだろう。同様の聖域は各地にある。

著者はそんな心のふるさとに引かれながら、これは自分の中にある古層への旅ではないかと思う。ますます世俗化する社会で、もう一人の私の発見が生きる意味を与えてくれるのかもしれない。（新潮新書、760円+税）

仏教抹殺

明治政府が点火した廃仏毀釈

鵜飼秀徳著

明治日本の乱暴な側面の1つが廃仏毀釈。神社神道を国づくりの理念とした明治政府が出した神仏分離令は、神社に仏教的要素の排除を求めるもので、寺は対象にしていなかったのだが、それに対して地方の為政者から庶民までが過激に反応した。貴重な文化財でもある堂宇や仏像、仏具が二束三文で売られたり、たき火に燃やされたりした。

仏教にとってはまさに法難だが、浄土宗住職の著者は「明治以降も仏教が消滅することなく、今日まで続いてきているのはある意味、廃仏毀釈があったからではないか」と言う。廃仏毀釈の要因を①権力者の忖度、②富国策の寺院利用、③日本人の民族性、④僧侶の堕落とみるからで、④では松本の真言宗若澤寺（にゃたくじ）のように住職が妾の元に入りびたった寺もあったからだ。

日本仏教は神道信仰も篤い聖徳太子が国づくりに受容して以来、神仏習合が基本になる。日本人の生き方そのもので、特に教理のない神道は、外来宗教に寛容だった。平安時代には本地垂迹説が出て、天照大神は大日如来が、八幡神は阿弥陀如来が、素盞嗚は薬師如来が、それぞれインドから日本に現れたとした。そして神社の中に寺が、寺の中に神社が作られ、実務は理論的に優れた僧侶が主導するようになる。伊勢神宮でも同じで、天皇も仏教に帰依し、火葬されることを望んできた。それを明治政府が神道で整理したのである。

①では、倒幕に出遅れた藩主が新政府の政策を先取りしたり、②では仏像や仏具を溶かして大砲を鋳造したり、各地の事例を、元新聞記者の著者は丁寧に取材している。あの島津斉彬も、討幕資金のため寺領を没収している。明治初期に鹿児島の寺はほぼ半減し、隣の宮崎は小さな諸藩ゆえ、それ以上に寺を潰し、今でも神葬祭が多いという。そんな騒乱が数年で終わったのは、③の日本人の民族性による。地域に必要とされない寺は生き残れない。少子高齢化の今、仏教はそれ以上の危機にあると著者は警告する。（文春新書、880円+税）

死者と菩薩の倫理学

日本人の生き方を問う

末木文美士著

子供の頃から生きにくさに苦しんできた著者が、生きる意味を見いだすため、世界観や人生観を体系化、明確化する必要から哲学を志しながら、西洋哲学に違和感を感じて印度哲学に移り、さらに身近な立脚点を求めて日本仏教史に転じ、たどり着いたのが表題のテーマである。

その契機となったのが、戦後、田辺元が教え子を戦地に赴かせた慚愧の念から発表した『懺悔道としての哲学』で、そこで田辺が唱えた「死の哲学」を、より正確には「死者の哲学」だと著者は解読する。ここでいう死者は、神仏や他者など自己を超えた存在一般で、中世仏教が論じた「顕」と「冥」の冥のこと。供養など死者との交流が日本仏教の基本にあり、著者はそれを軽視するいわゆる葬式仏教を肯定的に評価する。

仏教とりわけ利他行を説く大乗仏教は極めて倫理的で、その典型が菩薩である。菩薩とは仏になるため修行中の衆生のことで、その利他行は前世の釈迦の物語とされる「ジャータカ」に様々な事例が残されている。それを理論的に確立したのが「法華経」で、多くの宗派で最高の仏典とされる。

著者の指摘で面白いのは、自分も真の自分にとっては他者だという感覚。二重構造だから、反省したり、喜んだりする。自分をガイドする自分がいることの発見は、哲学の入り口なのかもしれない。

菩薩行の極致とも言えるのが親鸞の「往相即還相」の思想。念仏を唱えれば、阿弥陀如来の力で衆生は浄土に往相し、如来となった衆生はそこから衆生界に還相して衆生を救う。生者と死者との絶えざる交流がこの世とあの世を支えているのである。それが、中世に完成した日本人の死生観、哲学であった。

繰り返し出てくる言葉が「関係は存在に先立つ」というテーゼ。菩薩行はそれに気づいた個人の日常的な営みで、私たちは死者や他者との関係によって存在しているという冷厳な事実に向き合わされる。（ぷねうま舎、2600円+税）

都会のオアシス

稲毛神社（神奈川県川崎市）

主祭神は武甕槌神。創建の年代は、神木の大銀杏の樹齢が千年と推定されることから同社が古社であると推定できる。社伝によれば、景行天皇（第12代）の東国巡遊の折、同社で賊難を避けたと言い、また欽明天皇（第29代）の代に、動乱を鎮めるため、幣帛と七串を奉り、新たに経津主神、菊理媛神、伊弉諾神、伊弉冉神を配祀せしめ、戦勝と後の親和協力を祈り、以来長らく勅願所であったとされる。鎌倉時代には、佐々木四郎高綱が源頼朝の命を受けて社殿の造営に当たった。

当初は「武甕槌宮」と称していたが、平安時代末期に当地の領主であった河崎冠者基家が山王権現を勧請して以降「河崎山王社」「堀之内山王権現」と呼ばれていた。その後、鎮座地の名をとって「稲毛神社」と改称し、明治中期には定着した。江戸中期に川崎宿本陣当主の田中丘隅（きゅうぐ）によって造営された荘厳優雅な社殿は、昭和20年（1945）の空襲により灰塵と化した。その後、氏子崇敬者の赤誠によって昭和38年（1963）に現在の華麗なる社殿が新築された。昭和41年（1966）に神社本庁より、「別表に掲げる神社」に指定される。

稲毛神社の手洗石は、江戸中期に民政に大きな業績を残した田中丘隅が、勧請支配格に就任した享保14年（1729）に彼の一族と手代衆によって奉納されたもの。正面には奉納した五人の名前が刻まれている。川崎宿に残された数少ない貴重な資料であり、川崎市の重要歴史記念物に指定されている。京急川崎駅から徒歩9分。

「性解放理論」を超えて

―統一思想 VS 神の言（ことば）を否定する思想―

性解放理論の思潮、フェミニズムなどを概観し解説。それらに対する統一思想による批判と克服を行うとともに、天来の愛と性のあり方を提示し、神の創造理想と真の家庭理想の実現のための思想的啓蒙を図る。人権思想に従う人生か、神が人間に与えられたみ言に従う人生か、文鮮明・韓鶴子ご夫妻によって打ち立てられた「統一思想」に、今その解決の道を求める。

一　性解放理論の台頭
二　フロイトを超えて
三　フロイト左派を超えて
四　フランクフルト学派を超えて
五　ポスト構造主義を超えて
六　フェミニズムを超えて
七　日本の性解放理論への批判

●大谷明史 著　●四六判/208頁
●定価1,728（本体1,600円＋税）

蘇る愛と生命

―進化論を克服した文鮮明師の統一思想

進化論は今、自然科学のみならず文化、芸術などあらゆる分野に影響を及ぼし、その結果、神が人々から遠ざけられている。本書は、進化論を批判・克服する文鮮明師の思想を、師の言葉を通して紹介するとともに、「統一思想」に基づいた新創造論を提示する。進化論の間違いに気づかせ、神の創造理想という真の人生の指針が与えられる一冊。

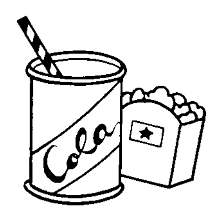
Ⅰ　進化論から新創造論へ
Ⅱ　神の実在と創造の原理
Ⅲ　創造神話と新創造論
Ⅳ　霊界からのメッセージ

●日本統一思想研究院 編著　●四六判/320頁
●定価2,160（本体2,000円＋税）

（株）光言社 〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町37-18トツネビル3F お問い合わせ TEL03-3460-0429
ご注文「光言社オンラインショップ」https://www.kogensha.jp/shop/

―ご紹介下さい―

ちょっとしたスペースがあれば設置できます。（場所の提供だけで…）
情報をお待ちしております。まずは当社へお電話を！



ご紹介して頂いた方には（北海道～九州）
ビッグプレゼント進呈！！

《サントリー》

《アサヒ》

《コスモフーズ》

株式会社 コスモフーズ　本社、自販機紹介担当まで
〒331-0804 さいたま市北区土呂町 1-46-9
TEL 048-651-4273　FAX 048-651-4142